

「岩船地蔵尊」

千葉県いすみ市

岩船海岸には、大しけにあった七十五座の神々が、漂流してこの地に上陸したという古い言い伝えがある。この伝説は、布施大寺の三上家に伝わる古文書や岩船地蔵尊の縁起におおよそ次のように伝えられている。

後宇多院の建治元年(1275)9月、中納言の藤原兼貞が三隻の船で大海を航行中、たまたま台風にあった。はげしい波風に翻弄されたが、不思議なことに、竜宮浄土に漂着した。やがて再び海上に浮かび、数日後に岩船海岸に流れ着いた。このとき12人は船中で死んだが、残りの63人は地元の漁師に助けられ、粥などの食べ物で手厚くもてなされた。波風が静まると、奇瑞(めでたい不思議なしるし)があらわれて、人々の乗ってきた船はたちまち消えその姿が大きな岩(人々は「御船岩」と呼んでいる)に変わった。村人はこうした不思議な出来事により、流れ着いた人々を神に祭るようになった。その後、海岸に流れ着いた人々は布施の大寺地区に移り安住したという。

こうした伝承により岩船地区ではこの七十五座の神々を供応する神事が昔から続けられている。秋祭りの初日、氏子は決まって新米の飯とまる餅、地元でとれたヒジキ、生ナス、カツオブシを神社に持ち寄る。そしてこれらを七十五の白木のお膳とお椀に盛って神前に供える。このとき船中で亡くなった12人のお膳にはカツオブシはつけない。神事が終わるとはじめて御輿の渡御を行う。

岩船の地名の由来は、いろいろと言われているが、この地域は七十五座の神々が漂着する前は「小千谷村」とっていた。神々の漂着伝承によって「岩船村」と改めたという説、またこの村の近海は昔から豊かな漁場であったので、大漁と深いかわりのある「祝船」が語源であろうという説などがある。



岩船地蔵尊

みどころ



- 七十五座の神々が上陸した釣師浜は、地蔵尊の南500メートルにあり、ここには一行が乗ってきた船が岩に変わったとされる、「御船岩」が現在もある。また毎年8月23日24日の両日は縁日が行われ、花火大会・灯籠流し等で賑う。